

名古屋市内中学・高校における 進学指導及び生徒指導の現状

研 究 部

石 黒 鈺 二・中 尾 正 三・中 根 一 芳

畑 実・兵 藤 柝 夫

Ⅰ ま え が き

戦後大きく変った新教育の最もいちじるしい特徴の一つは、今までの詰込主義と形式的訓練を否定して、生徒の自主的な生活態度を育て、真の知識と教養を身につけさせていこうとしたことであった。そのために最も重視されたものに生徒会・クラブ・ホームルームなどの特別教育活動がある。生徒が自分たちの生活の問題を自分たちで話しあい、計画し、処理していく中で真に民主的な態度を身につけていくことは、古いものがまだ多く残っている日本の社会の民主化を計るためにも重要なことだと思われた。

しかし現在生徒会は危機にひんし、クラブはうまくいってはず、ホームルームのロングタイムはもてあまされるか、なくなるかしてしまっているのが、多くの学校の現実の姿である。

我々の学校は名古屋移転のため、新一年から始めねばならず、新しい創設期といってよい段階である。生徒会の組織もこれからというわけであるが、その時、現実のこういう姿をさけて通ることは不可能と考えられる。この現実が、何からおこり、どのような解決が見出されるであろうか、そうしたことを無視しては望ましい理想もくずれてゆく外はない。この問題について考える時、最も重要なのは年々激化する入学試験とそれに対する準備教育のことである。学校が真空の中になく、現実の社会の中にあり、その中でよりよい生活を願う生徒や父兄の希望を無視してはなりたち得ない以上、教師は進学指導ということを何らかの形で考えざるを得ない。こうして進学指導が始

められると、限られた教師の時間とエネルギー、限られた学校の授業時間数の多くの部分がそれに奪われるようになっていき、生徒会その他はだんだんその時間を見出すことができなくなり、生徒の熱意もそこには集まらないようになっていく。

進学指導を無視しては、生徒会を初めその他望ましい教育を考えても、現実には何も出来ない。そこでわれわれはまず生徒や父兄がこの問題についてどう考えているかを知り、又他の学校でこの問題をどう考え、どう処理しているかを知ろうとした。そうした実態を知った上で我々の対策を考えていこうとしたのである。

ここに発表するのは、そのうち後者に関して本校研究部が調査した現実の姿である。(註1) 我々は名古屋市及び周辺の公立中学・高校の中から、受験準備を特に熱心にやっていると思われるもの、生徒会指導を熱心にやっているもの、及びその中間のものそれぞれ典型的と思われる学校を、中学7校、高校8校を選び、個人的な知合いを通して聞き込み調査を行った。その際焦点をしばったのは、次の諸点についてである。

- (1) 進学指導はどのように行われているか。
 - (a) 正規の授業の中に受験準備が加味されているか、諸調査、テストはどうしているか。
 - (b) クラスのわけ方はどうしているか。
 - (c) 実力考査は行っているか、科目・回数。
 - (d) 補習授業は行っているか、科目と時、又その報酬について。
 - (e) 教師はどのように考えているか。
 - (f) そ の 他。

- (2) 生徒会活動はどのように行われているか。
- (a) 組織はどうか。特に役員選出は直接選挙か、間接選挙か。
- (b) クラブ活動はどういうようすか。
- (c) ホーム・ルームはどのように行われているか。
- (d) 生徒の活動態度はどうか。
- (e) その他。

注 (1.) こゝにみられる實態が現在の中學及び高校の現實のすべてを現わしているとい、難いが、その大体は知ることができると思う。又この調査は學校の教師側の意見のみで生徒がそれについてどう考え對應しているかということについてはふれられていない。それは殘された問題であると考え。なお調査校名は諸種の事情から發表しないことにした。

II 中学校の部

1. 進学指導

(a) 正規の授業の中に受験準備のことを全く考えていないのは1校、後の6校は問題集を使用し、数学・英語の授業時間をふやしている。

(b) クラスを受験組、就職組とコース別に固定している学校は7校中2校である。こゝで注目すべきは最も準備教育に熱心であると目されている学校が昨年はそれをやったが、今年はやっていないということである。

(c) 実力考査を行っていない学校は1校、後の6校は行っている。中、年3回が3校、年4回が1校、5回が1校、毎週1科目ずつ行っているのが1校。実施学年は3年が主であるが、1年生から行うのが1校ある。なおテストは学校で教師の手によって行われるのが普通であるが、生徒会の奨励会という組織によって行っているのが1校ある。

(d) 補習は夏冬の休みには7校とも行う。普通の週日に行っていないのは1校。他の6校は、週4日1校、週5日2校、毎日2校、隔日2時間1校と実施している。対象は3年生の希望者である。去年までは2年生もやっていたが今年はやめたというのが1校あった。補習に対する報酬は生徒1人当り80円～100円が父兄から出されているのが普通であるが、その教師個人への渡され方は学校によってまちまちで、そこには多くの問題がはらまれているように思える。

(e) 以上のような実情の中で教師はどのように考えているかは一概にはいえないが、多くはこれを望ましい姿であるとは考えていないし、又補習がそれほど効果をあげるとは思っていないようである。それにもかかわらず、“現状ではやむを得ず……………”と押し流されているのが実情である。但し1校は校内が進学準備によって望ましい教育を破壊したくないという気持でまとまって、正規の授業の中で望ましい教育を守りぬいていこうとしている。

2. 生徒会活動

(a) 組織はどの学級も一応まとまったものを持っているが、それがほんとうに動いているかというところでは、3年生からは立候補者が少なく、とりわけ後半の任期の役員を最高学年の3年から得ることはほとんど不可能である。ある校のごときは今年も学年度初めからはや3年生の役員を得られず、1年をおえてきたばかりの新2年生から役員を出したという。こうして直接選挙を守りぬくことが不可能になって間接選挙制をとるようになったところが2校ある。その中の1校は議員とクラス長が兼任という形までとっている。

(b) クラブ活動にも進学準備は大きくしわよせされてくる。補習が4日～6日も行われてくると実質上3年はクラブ活動にも参加できなくなってくる。3年は自由というたてまえにしている学校が2校ある。一応全員参加のたてまえをとっているものは5校あるが、正規のクラブの外に自由クラブというものを設けているのがそのうち3校もある。

(c) ホーム＝ルームについては年次計画をたてて実施しているものが4校、他の3校にはない。ロングタイムはどの学校でも週1時間行っているが、それと全校朝礼と兼ねているところが2校(うち1校は隔週)、3週のうち2回をホーム＝ルームに、残りの1時間をクラブ活動にまわして時間を浮かしているところが1校ある。生徒集会を定期的にもっているところは3校しかない。

(d) このような状況で、生徒会が生徒の手で

本当に活潑に運営され、週の努力目標なども生徒自身の手で自主的に決定されているのは1校。やゝ活ぱつと一応いえるのは2校、他は低調でホームルーム活動もクラスによってまちまちであり、あるいは役員は積極的であるが他の者は無関心であるという状況である。

以上項目別にながめてきたが、学校によってそのおのおのが有機的なまとまりをもって毎日の教育が運営されているのである。一般的にいて進学準備体制が望ましい学校教育の姿をゆがめ、生徒会活動のための時間と関心を奪い去っているといつてよい。生徒たちもその中で精神的にも肉体的にも一生のうちで重要なそして国民教育の観点からも重要な中学時代を過すのである。この進学一点張の中で学ぶ生徒がすべて進学するのではない。進学しない生徒たちは、そこを出たら再び体系的な教育の機会を永久は与えられないであろう最後の時を自分たちのためにではない体制の中で過さねばならない。進学する者からも、真実の勉強と生活は失われ、断片的知識しかそこにはないのである。

Ⅲ 高等学校の部

高等学校においては、小・中学校と大学の間にはさまれ現在の「新教育」の各種のしわよせを全部背負っているといわれ、盛られた教科内容それ自体に相等無理があると考えられる。加うるに大学への入学の関門はますます激烈になってきているので、前述の中学の部における偏向の傾向は更に一層強い。いま、中学と同様な項目別の下に、進学面と生徒会との各校の現状をのべることにする。

(1) 進学指導について、

(a) 教科教育や進学指導、あるいは職業指導の参考とするため、各種のテストはどの程度行われているであろうか。知能テストはほとんどの学校の一年で行われている。外に二年で行うのが1校、適宜の時期にというのが1校ある。クレペリン検査は1校を除いて全部、又別に向性検査、情意テストを行っているのが1校ある。次に個人指導についてみると、ほとんどどの学校も担任教官一任で、これを校長やデーン、進学就職指導係

が補佐したり、学年担任会議・指導委員会で一括した問題を取り上げるという形式が普通である。これと関係して担任と父兄とのつながりは、定期的に年6回会合をもつというのが1校、地区別P.T.A連絡会をひんばんに行うのが1校、他は適宜の時期に学年毎に父兄との会合が行われている。

(b) 授業の方針は国語・数学・英語等のいわゆる受験課目に相当重点が置かれてきている。教科書以外に問題集や、参考書を使用して、担当教官が苦心して受験対策に当たっている。これは科目によって高校の課程が、圧縮されぼう大な内容が盛られていて無理があり、又地域的にも学校が密集している割合に校外でこの不足を埋め合わせてくれる予備校などの機関を求め難い特異な現状にあるからではなかろうか。生徒の力に応じてどの学校も二学年の初めから進路別の学級編成が行われ、いわゆる受験組と就職組とにわけられる。受験組の数は、モグリ入学により生徒の入学時の成績が学校により偏向しているため、全体の20%から80%を占めている。組み分けのしかたは担任や進学係の指導によるものと、生徒の成績・希望により機械的に分けるものがある。こうして受験指導は教科内容をも相当にゆがめていくことになる。

(c) 実力考査・模擬試験は各学校で色々な形式をとっている。まず回数は三年で年6回が普通で、7回・8回(内二回は学力コンクール等の外部のものに参加)という学校もあり、三年にはほとんど全科目を課している。別に模擬試験という形を整えて考査を行っているのも1校ある。2年には希望者を三年の試験に合流させるところや、課目別に時期を分けて行ったり、科目の種類、回数も区々である。一般には国語・数学・英語を主体として4~6回というところである。一年の実力考査は少ないが、国語・数学・英語について年2回という学校が1校ある。実施の状況は試験日が定められ、丸一日中試験が行われるのである。このようにして生徒は受験に対する志気をあおられると共に、学校全体が受験準備体制を一層強くさせられていく。教師側からみると、この考査は相当生徒の受験技術面を向上させる上に効果もあ

り、その個人成績は志望校の選定指導上有力な材料とされている。

(d) 補習授業は先にのべたように校外機関が僅少で、生徒もいきおい学校に頼るより外なく、学校も色々の事情から「止むを得ぬ」として、どの学校も苦心してやりくりしている。少ないのは三年に週1～2回というのから、多いのは毎朝夕50分ずつ、夏冬休暇全日というに到るまで区々で平均週当たり約8回位である。担当教官の謝礼にも各種の考慮が払われ、各学校のお台所のやりくりの苦心振がうかがわれ、色々と学校の実情をよく反映している。ある学校では三年週1～2回で受講者が、150円負担しており、ある学校では各学年(社会・理科は三年後期より)週5回で、謝礼はP.T.A会費の中から校長名義で出しているし、又ある学校では一年国語・数学・英語で3回、二年社会以外で6回行い、生徒1人当り150円負担し、補修手当の外に試験手当が教官に支払われている。又朝の50分に120円、午後の50分に80円を生徒が負担しているところや、進学関係者のみの「進学P.T.A」を組織してこれから1時間当り200円を教授代に当てるところや、受講生徒1人当り科目の数に関係なく300円を負担するという学校もある。

このようにして各方面から追い込まれて実現した補習は実際効果が上っているであろうか、クラブ活動との時間の割り振りや、生徒が自分で立てた勉強のプランとの食い違いやで、なかなか実効は上げ難いとの声も聞かれる。そこで多くの学校では補習を正規授業に繰り入れ一時補習を全廃したが、その後更にその上に復活して上記の時間数が設けられて来たのが実情である。

(e) 上記種々のものについて総合的に考えるのが、進学指導委員会や、進学就職係であるが、生徒への反響はどうであろうか。教師の見るところでは、学校と生徒の気合がマッチして本当に自他共によくできているとする学校は少ないのではなかろうか。学校側が強力で生徒が全面的に学校に頼り切っているところや、学校側があせり過ぎて多くの生徒に過重負担になっているところやで賛否両論というのが実情である。この努力の成果については種々の見方があるので簡単にはいい切

れない。しかしどの学校も実に一層の成果を期して、年々そのやり方も、技術的にも量的にもせり上って行くのが現状のようである。

一方就職についても、年々競争が激しく、そのための特別の準備が年々盛んになってきている。ある1校では約半数の生徒が就職するため、担当教官がそのための指導に色々と苦心をする一方、就職期にはほとんど毎日授業後出張して奔走を続け成果を上げている。この学校では就職後の状況も綿密な調査がされ、職場との連絡もとられ、指導が非常に行きとどいている。

(2) 生徒会活動

(a) 組織はどの学校も一応まとまったものを持っており、ひところの理想を追った状態から脱皮して、それぞれ学校の実情に合わせて、実行し易いように改められてきている。組織の形態をくわしくのべる余裕はないが、生徒会長の選出方法をしらべると、全校投票によるものが2校、外は全部議員の互選という形になっている。役員は入学試験の勉強と両立し難いという考で、どの学校も成績上位者が出たがらない。役員の成績をみると、上位者が選ばれるとするのが2校、他は全部上中位者ということである。上位者が選ばれるとする2校の内1校では学校側も生徒も受験勉強と生徒会活動との両立を確信している。

次に予算は大体80万円から100万円位で、全く生徒の自主性が保たれ、この面ではなかなかはやかである。予算に関連して、クラブ活動の中で運動クラブなど選手制度で特に予算を食うものに対しては別途に卒業生その他で後援会を組織しているというのが1校ある。

(b) 生徒のクラブ加入をどう取り扱うか又一つの問題であるが、これについては一、二年全員強制加入というのが1校、他は全部自由意志に任せている。事実全員が入部しても設備その他で収容し切れぬのが現状である。選手制度の形を取って、大量の入部者が1、2ヶ月で脱落していくところもある。新聞の発行と学校との関係は正式に顧問検閲というのが2校、他は全部生徒会一任ということになっている。

(c) ロングタイムについては調査が不十分であったが、一応年次計画に従ってというのが4

校、計画なしというのが1校、他の2校は不明であった。生徒集会は1校を除いて全部毎週1回行われている。その中2校は校長訓話が織り込まれている。全く生徒の自主性を強調しているのは1校である。ロングタイムは年々影を薄くし、生徒集会はだんだん朝礼・校長訓話という形に流れて行くのが現状のようである。

(d) 生徒の活動状況については割り合い活ぱつに活動しているというのが1校、他は程度の差はあるが大體消極的であるとしている。又1校では生徒会は不活ぱつでも運動だけは選手が盛んに活躍しているということであった。

さて以上項目毎に現状を眺めて来たのであるが、これらの項目が各学校でどのように結合され、どのように有機的な作用を営んでいるかを見なければならぬ段階にきた。しかしこれは学校の沿革や、伝統を通してみなければならぬので、ここでは紙数の関係上割愛しなければならない。ただ高校の置かれた立場がとにかく困難なものであることは確かで、これを乗り切るため学校

により、光輝ある伝統の光の下に自覚を持つことにより、又小さな学校では校内に流れる和気あいあいの団結力を力として、あるいは難局に向ってまっしぐらに突進することにより、これらの問題に解決点を見出すべく、いずれも懸命に努力を払っていることを述べたい。

IV む す び

以上調査の結果をのべたのであるが、とかくこの種の調査は公式の書類にはより難く、数少ない質問者と応答者の共同作業となる点に問題がある。これら調査者の主観的な見方も作用し、質問の分野も全般にわたり難く、かたよる恐れなしとしない。又これを記述するに当たっても筆者の主観が入り易く、これ等の問題点を十分解明し難い結果となる。しかしそれにもかかわらずこれらの足でしらべた小稿が現在の中学及び高校教育の問題点の解明に少しでも寄与することになれば幸これにすぎるものはない。